

強いチームには「勢い」がある

2022・2・22 重枝 一郎

みなさんは、空気がどんよりと重たい集団の一員になった経験はあるか。私が知る限り、それは業種や職種によるものではなく、あくまでもそこに籍を置く人の問題だと思う。私が教育委員会にいたとき、前年までは「ペンが落ちた音が響くような職場だった」と聞いたことがある。おそらくその職場には、チームとしての「勢い」や前向きな空気感は生まれにくかったと思う（やらされ感）。得てして「勢い」のない組織は、あいさつも無い、すぐ隣に座る同僚がしていることも関心をもたないので協力もない。当然、帰属意識が薄い。よって、そこにいた人の口癖は「長くて3年間かな。我慢しよう」というものであった。私は、これを「身体を閉じて仕事をする」と言っていた。

私はさまざまな職場を経験し、本校に来た。そこで思ったことは、「先生方が身体を開いてくれている」ことである。これはなかなかないことである。とてもうれしく感じた。特に学年主任の先生方がきちんと身体を開いている。このようなリーダーの存在はメンバーの身体を開き、チームに「勢い」を生む。これは間違いなく他校より優れている。

※「身体を開く」とは・・・

「ネガティブな感情を前面に出さない」
「人の悪いところばかりに目が行くのではなく、よいところを言葉にする」

不機嫌なリーダーの存在は、不機嫌なメンバーがいる以上に場の空気を重くする。一昔前なら、あえてリーダーが不機嫌さや威圧感を示すことで、場に緊張感をもたらすというリーダーシップもあった。しかし、これからの人材育成やチーム力向上において、こういうリーダーの存在は必ずしもクリエイティブではない。メンバーをおとなしく、人の顔色をうかがう人にしてしまうだけである。もしくは、大きな負の感情を抱かせ、チームの一員になれなくしてしまう。そして、一人の負の感情は必ずチームに伝染して「勢い」を消す。しかし、どんなチームでも少し意識を変えることで「勢い」をつけることができる。あたりまえのことだが、お互い認め合う関係をつくることである。お互いプラスのメッセージを送ることである。言葉で。中高生の運動部の世界でも、いくら劣勢に立っても声だけは元気に出していくというのが、最低限の“セオリー”である。ましてや大人の職場なら、あいさつはもとより、お互いプラスのメッセージを送り合うことで「勢い」を生むことができる。

最後に私自身について述べる。チームに「勢い」を生むためには、全員のモチベーションを高めることが重要であるのは言うまでもない。一人一人のモチベーションを高める最良の方法は、私自身のモチベーションが高まっていることだと思う。これからもみなさんに助けをもらいながら頑張る。おそらく、いろいろな試みをし、失敗もすると思う。しかし、そのことがみなさんのモチベーションを高める原動力にもなると思ってやっていく。なぜなら、「ピンチ」がなければチームにはなれないと思うからである。

【裏面】理事長、園長、学長と私で月に1回（原則第3水曜日）に懇談会をしている。そこで、学院の中でのセクト主義はよくないという話になった。私もいろんなつながりを活性化させていきたいという思いがある。先日の職員会議でお話しした「ミッション・スーパー・アリーナ」の件もしかりである。早速、アリーナの貸し出し調整する部署にあいさつをしてきた。また、懇談会の際、園長がこれまでの連携実態をプリントにしてくれた。裏面に紹介する。